

# 現代方言に継承された《醒世姻縁傳》の 同音仮借の語 ———複音節語の場合<sup>1)</sup>

植田 均

UEDA, Hitoshi

## 0. 序言

### 1. 付加語構造の語

### 2. その他の構造の語

#### 2.1. 本字が確定できるもの

#### 2.2. 本字が確定できないもの

## 0. 序言

本稿は現代方言に継承された《醒世姻縁傳》(略称《醒》。以下同じ)の同音仮借の複音節語の場合を取り上げた。なお、単音節語の場合は植田 2005, p.p.190-208<sup>2)</sup>を見られたい。複音節語は付加語の構造を採るものが多い。付加語構造の語は、「中心語+付加語」の構造を形成で、付加する字はほとんど軽声で、同音または近似音である。したがって、同音仮借が多い。一方、その他の構造の語は「中心語+補足・付加語」の関係ではないものである。

## 1. 付加語構造の語

付加語構造の語は、付加する字に意義上の重さが無く、その字が仮借になる場合が多い。

また、付加語構造の語は、本字が確定していることが多い。

この語群：

直勢（直實）、熟話（熟滑、熟化）、窩別（窩慙）、硬幫（硬棒、硬梆）、折毒（折墮）

### 直勢 zhíshi（直實）

釈義：「(性格が)正直で率直である、きっぱりしている、竹を割ったようである」。現代共通語では一般に“直爽;坦率;耿直”。軽声語である。

《醒》の例。

尋思了一遭,想到對門禹明吾的 母老夏為人直勢,又有些見識,央他同晁書媳婦合兩個媒

婆, 備了四個頭口, …。(18.5a.7)<sup>3)</sup>

(一渡り思いを巡らし、向かいの禹明吾の乳母老夏は正直者でいっばしの見識もある人だと思ひ到った。そこで、彼女に頼んで晁書のかみさんと二人の仲人女と共に行って貰おうと、四頭のラバを準備させた。…。)

文脈により、“直勢”は“直實”(釈義“直爽”)と解すべきである。《元明清白話著作中山东方言例釋》(略称《例釋》。以下同じ)に“直勢”(釈義“直爽;坦率;耿直”)とする。

“直勢”の方言分布は山東省淄博である(《汉语方言大词典》<略称《汉方大》。以下同じ>に拠る)。

《现代汉语词典》(略称《现汉》。以下同じ)、《古今汉语实用词典》(略称《古今》。以下同じ)、《漢語詞典》(略称《汉语》。以下同じ)、《现代汉语词典·補編》(略称《補》。以下同じ)いずれにも未収。《汉语拼音词汇》(略称《拼音词汇》。以下同じ)に未収。

同音語“直實”(釈義“直爽;坦率;耿直”)の方言点は山東省済南、桓台、莒県、平邑、寿光である(《汉方大》、《山东》、《現漢方大》(p.2113)に拠る)。

**熟話** shúhua(又)shúhuà (熟滑;熟化)

釈義:「①熟知している、よく理解している。②(動物などを飼育して)馴らす」。現代共通語では一般に“①熟;熟悉。②驯化;驯順”。

《醒》の例。

別説没曾見你, 連耳朵裏聽也沒聽見有你。你新來乍到的, 熟話也沒曾熟話, 你就這們喬腔怪態的。(95.5a.1)

(あんたを見たことがないだけじゃなく、この耳でもあんたの名を聞いたことがないよ。急にやって来て、よく知っているかどうかだって、あんたはなんて変なことを言うんだねえ)

文脈により“熟話”は釈義“熟;熟悉”と解される。

《现汉》、《古今》、《汉语》、《補》いずれにもこの意味では未収。

《汉方常》に“熟化”(釈義“熟;熟悉”)で山東方言とし、《醒》より挙例。《山东》(釈義“(1)熟悉。(2)驯化。(3)技術嫻熟”)にも“熟化”で収める。(1)の省内方言点を桓台、青州、(2)を新泰とする。

《汉方大》に“熟话”は未収。

《醒》の上記釈義①の“熟化”の例。

狄婆子説:“這也就瑣碎少有的事。陳兒, 你還往我屋裏睡去罷。他明日情管就合我熟化了。”(45.7b.1)

(狄奥さんは「こんな面倒な珍しいことがあるのね! 陳ちゃんや、お前は私の部屋へ来て寝なさい。あの子はそのうちきっと私にも慣れるでしょうよ」と言いました)

《兒女英雄傳》からの例。

褚大娘子道：“…那大爺纔坐下，瞅着那麼怪腩腆的，被我惱了他一陣，這會子熟化了，也吃飽了，…”（《兒女》15.17a.9）

（褚のかみさんは「…若様は漸く腰掛け、とても恥ずかしそうにしているのを見て、私が少し注意したのよ。この時はもう慣れて、お腹も一杯になって、…」と言った）

“熟化”（釈義“(1)[形容詞]熟悉”の方言点は山東省聊城、淄博、桓台である（《漢方大》(p.7137)に拠る）。

“熟化”の他に“熟滑”とも作る。

奶奶長，奶奶短，倒象是整日守着的也沒有這樣熟滑，就是自己的兒媳婦也沒有這樣親熱。（40.10b.4）（“自己” = “自己”）

（奥様、奥様と言って、まるで一日中仕えている者でもこんなに親しくはなく、また、たとえ自分の息子の嫁ですらこんなに親しくはありません）

教授的妾龍氏說道：“怕怎麼。誰家的坐家閨女起初就怎麼樣的來。再待幾日，熟滑下來，只怕你留下他住下，他還不住下哩。”（45.6a.4）

（薛教授の妾である龍氏が「どうってことないですよ。どこの家の嫁入り前の娘でも初めはどうだというの？もう二三日して慣れてくれば、恐らくあなたがあの子をこの家に泊ませようとしてもあの子は泊まりませんよ」と言いました）

“熟滑”（釈義“[動詞]熟识”の方言点は冀魯官話・山東省淄博、中原官話・山東省である（《漢方大》(p.7139)に拠る）。

この他にも異体字は多い。例えば、《古方言》は“熟会”を《刘知远诸宫调》より、“熟分”を《古今小说》より、《汉宫秋》より“熟滑”、逆序語“滑熟”を元・无名氏《货郎旦》より各々挙例する。

《例釋》に“熟化”、“熟滑”（釈義(1)“熟识;熟悉”）を《醒》第四十五回、四十回、《真本金瓶梅》より挙例。“熟化”（釈義(2)“驯顺”）を《醒》第七十回より挙例。《金瓶梅词典》に“熟滑”（釈義“熟悉;熟化”）を収録。

なお、次に示す《醒》の“熟化”は、以上とは全くの別義“驯化;驯顺”「(動物などを飼育して)馴らす」(上記釈義②)である。この釈義([形容詞]驯顺)の方言点を山東省淄博とする（《漢方大》(p.7137)に拠る）。

《醒》の例。《例釋》も次の二例を“驯顺”の釈義で挙げる。

童七道：“承官兒，你不希罕銀子罷了，你没的不希罕會花哨的臘嘴麼。是養活熟化的。”（70.7a.10）

（童七は「承ちゃんや、あんたが銀子を有り難がらないのはまあいいとしても、まさか綺麗な羽のしめを欲しくないことはないよね？飼って馴らしてあるんだよ。…」と言いました）

童奶奶道：“這臘嘴養活了二三年，養活的好不熟化。…”（70.8a.4）

（童奥さんは「このしめは二三年飼いましたが、とても馴れまして。…」と言った）

### 窩別 wōbie（窩憋）

釈義：「気分が晴れない、気がむしゃくしゃする、意のままにならない」。現代共通語では一般に“别扭；不舒暢”。

《醒》の例。

晁源要了紙筆，放在枕頭旁邊，要與他父親做本稿，窩別了一日，不曾寫出一個字來，極得那臉一造紅，一造白的；…。（17.11a.9）

（晁源は紙と筆を取り寄せ、枕もとに置き、父親に草稿を作って渡そうとした。一日もがいたが、一字すらも書けなく、焦って顔は赤くなったり白くなったりした。…）

文脈から“窩別”は釈義“煩悶”である。黄肅秋注に“別，与憋同义。含有委曲、勉强、费尽心力之意”とする。《例释》に“窩別”（釈義“憋”）で《醒》第十七回より挙例。《古方言》にも釈義“别扭，不舒暢”で収める。

“窩別”（釈義“憋”）の方言点は山東省である（《汉方大》（p.6316）に拠る）。

現代語の規範化文字では“窩憋”と作る。《现汉》、《古今》に“窩憋”（釈義“煩悶；不舒暢”）を方言語彙、軽声語、《汉语》に一般語語彙とする。《拼音词汇》に〈方〉符号を付して収録。これらの辞典類にはいずれも“窩憋”と作る。

《汉方常》に“窩憋”（釈義“煩悶；不舒暢”）で北方方言とし、《北京文艺》、梁斌《翻身记事》、单方等《千重浪》より挙例。

“窩憋”（釈義“煩悶；不舒暢”）の方言点は東北、北京、河北省、河南省安陽、山東省済南、寿光、桓台、淄博、聊城である（《汉方大》（p.6317）、《現漢方大》（p.5015）、《山东》、《北京话》、《現代北京》、《河北方言》、《南阳方言》に拠る）。

### 硬幫 yìngbāng（硬棒；硬梆）

釈義：「毅然としている、（態度が）強硬である」。現代共通語では一般に“态度强硬；坚强；坚硬”。

《醒》の例（《关中方言》は“硬棒”と作るが、「人民文学出版社本」、「古本小説集成本」は“硬幫”と作る）。

晁夫人説：“這駙丞可也硬幫。嘗時没聽的駙丞敢打人。”（32.10b.3）

（“嘗時”＝“常時”）

（晁夫人は「その駙丞も毅然とした方だね。以前は駙丞が人をぶったなんて聞いたことがないのにね」と言いました）

既是惹了這等下賤，爽俐硬幫到底，別要跌了下巴，這也不枉了做個悍潑婆娘。（95.8a.9）

(こんなにも賤しくやられたからには、いっそのこと最後まで強硬に出て下あごを出さなければ、悍婦となるに恥じないのである)

文脈から“硬幫”は釈義“坚强; 強硬”と解すべきである。《醒》の“硬幫”は単に「硬い、頑丈である」釈義ではなく、「態度が毅然としている、意志強固である」となる。黄肅秋注に釈義“原为形容身体结实。这里含有敢作敢为、不惧权贵过得硬的意思”とする。

《現漢》、《古今》は軽声語“硬棒”[yǐngbàng](釈義“硬; 结实有力”“结实; 坚强。充足有余”)、方言語彙とする。《漢語》に未収。但し、形容詞[ABB型]の“硬邦邦”、“硬绷绷”を一般語語彙で収録(“硬邦邦”は《現漢》、《古今》に非軽声語で一般語語彙)。《拼音词汇》に軽声語“硬棒”[yǐngbàng]を<方>符号を付して収める。

《漢方常》に“硬棒”を北方方言として、釈義(1)“结实有力”を老舍《四世同堂》、師田手《活跃在前列》より挙例。また、釈義(2)“硬”を林予等《咆哮的松花江》より挙例。《關中方言》は“硬棒”と作り釈義“老练; 能力强”とする。《山東》は“硬梆”と作り、《北京話》、《現代北京》は“硬棒; 硬梆”と作る。《河北方言》の詞目“硬邦”(釈義“很硬”)項に“硬邦”、“硬邦的”、“硬邦邦的”、“硬本本的”等を有す。また、詞目“硬”の項に“硬梆的”、“硬个帮咧”等を有す。なお、北方語ではないが、《吳》に“硬绷绷”として収める。

“硬邦”(釈義(1)“坚硬; 结实”)の方言点は山東省寿光、諸城である。また、釈義(2)“(身体)强健有力”の方言点は甘肅省蘭州、新疆維吾爾自治區烏魯木齊、四川省成都である。そして、“硬梆”とも作るとする(《漢方大》(p.5970)に拠る)。

“硬棒”(釈義“结实; 强壮有力”)の方言点は東北、黒竜江省哈爾濱、北京、河北省魏県、山東省長島、牟平、河南省鄭州、山東省平邑、江蘇省徐州、揚州、丹陽、新疆維吾爾自治區吐魯番、烏魯木齊、銀川である(《漢方大》、《現漢方大》に拠る)。

《例釋》に“硬哥邦”(釈義“形容非常坚硬”)と作り《海浮山堂詞稿》より挙例。《紅樓夢語言詞典》に“硬幫帮的”(釈義“形容坚硬的”)を収録。

### 折毒 zhédu (折墮[zhéduò])

釈義:「痛めつける、虐げる、いじめる」。現代共通語では一般に“折磨”。

《醒》の例。

程大姐自到周龍皋家, 倚嬌作勢, 折毒孩子, 打罵丫頭, 無惡不作。(73.1a.6)

(程大姐は周龍皋の家へ来てからは、美しさを恃み勢いを成し、先妻の子を虐待し、女中を殴り罵るといふ、悪業の限りを尽くした)

文脈により“折毒”は“折磨”と解さざるを得ない。

“折毒”の方言点は山東省聊城である(《漢方大》(p.2552)に拠る)。

《現漢》に“折騰”(釈義“折磨”)を、《古今》、《漢語》にも“折騰”(釈義“(1)搗亂、輾轉反側。(2)揮霍”)とする。《補》、《拼音词汇》に“折墮”は未収も“折騰”<口>を収録。

《山东》に“折倒”（釈義“折磨”）、同義語“折登”の省内方言点を桓台、青州、平邑、陽谷とする。《北京方言》、《現代北京》に“折登”、“折騰”（釈義“折磨”）、《徐州方言志》に“折搗”（釈義“折磨”）を収録。

“折墮”（釈義“折磨”）の方言点は山東省、南寧平話、広州である（《漢方大》（p.2552）、《現漢方大》（p.1645）に拠る）。

《例釋》に“折掇”（釈義“折磨”）で《聊齋俚曲集》より挙例。同音語“折墮”を《醒》第五十二回より挙例。《古方言》に同音語、近似音語“折墮、折毒、折掇、折倒（折到）”で立項する。

同音語“折墮”の《醒》の例。

姑子説：“這敢是你那一輩子與人家做妾，整夜的伺候那大老婆，站傷了。因你這般折墮，你從無暴怨之言，…”（40.8b.7）

（尼僧は「こちらは恐らく前世で妾として過ごされ、一晚中本妻様に傍らで立ってお仕えし足を痛めてしまわれた。このように虐げられても恨みごとは全く言いませんでした。…」と申します）

狄員外道：“你看他看去，把个孩子怎麼樣處制着哩。有這們混帳孩子。死心蹋地的受他折墮哩。”（52.5a.10）

（狄員外は「あの子を見に行ってくれ。どう罰を加えるんだらう。バカな子だよ！じっとしてみすみす虐げられているなんて！」と申します）

那婦人道：“狄嫂子，你聽我說，這使不的。丈夫就是天哩，痴男懼婦，賢女敬夫，折墮漢子的有好人麼。…”（69.2b.3）

（かの婦人は「狄奥さん、まあお聞きなさいな。あなた、それはいけませんよ。夫は天です。バカな夫は妻を恐れ、賢女は夫を敬います。夫を痛めつけるのは立派な人とは言えません。…」と申します）

韓芦一干男婦方纔束住不敢動手，扯着劉振白手，告訴小寄姐折墮他的女兒：“…”（80.9b.2）

（韓廬ら一連の男女はようやく矛先を収めた。今度は、劉振白の手を引っ張り小寄姐が韓廬の娘を虐待すると訴えた「…。」）

## 2. その他

ここに組み入れられるのは、付加語構造ではない複音節語の同音仮借語である。

### 2.1. 本字が確定できるもの

仮借字に対して本字が確定できるものを挙げる。

この語群：

出洗（出息）、肚喃（啞嚨）、老瓜（老鴿）、攘包（濃包、膿包）、屋業（物業）、

五積六受（五脊六獸）、伍旋（舞旋）、鹽鯨戸（檐蝙蝠）、造子（遭子）、着主（找主兒）

### 出洗 chūxi（出息）

釈義：「年頃になって美しくなる」。現代共通語では一般に“出落”。

《醒》の例。

叫做春鶯，到了十六歲，出洗了一個像模樣的女子，也有六七成人材，…。(18.8a.10)

(名を春鶯というのですが、十六才になったおり結構な美人に育ち、人間としてそこそこの才覚がありました。…。)

“出洗”は文脈により釈義を“年轻人的体格、面貌比以前长得好看；出挑”解すべきである。

“出洗”の方言点は山西省忻州である(《汉方大》(p.1273)に拠る)。

“出洗”は“出息”の同音仮借と考えられる。《现汉》、《古今》に“出息”を軽声語、釈義“长进；出落”で方言語彙とする。《汉语》に釈義“猶出挑”で一般語語彙とする。《拼音词汇》に無表示で収録するが、釈義は不明。

“出息”の方言点は東北、北京、天津市、山東省済南、寿光、甘肅省蘭州、新疆吾維爾自治區烏魯木齊である(《汉方大》(p.1274)、《現漢方大》(p.1118)に拠る)。

《汉方常》に北方方言、釈義(1)“长进”で張天民《创业》、《解放军文艺》1974.9より挙例。釈義(2)“出落”で峻青《黎明的河边》、郭先紅《征途》より挙例。《山东》に釈義“(1)有长进。(2)长大后有作为。(3)小孩或动植物长得健壮”とする。《现代北京》に釈義“(1)青年人(特指女性)的体态、容貌(向美好的方面)变化。(2)长进”とする。《河北方言》に未収。

《红楼梦语言词典》に“出息”の釈義を“(1)(知识、才能)长进。(2)指发展前途。(3)年轻人的体格、面貌比以前长得好看；出挑。(4)收益”とする。このうち、釈義(3)が該当する。

《例释》、《方言俗语》、《金瓶梅词典》に未収。《古方言》にこの意味では未収。

### 肚喃 dùnan（嘟囔）

釈義：「ぶつぶつ言う、独り言を言う」。現代共通語では一般に“嘟囔”[dūnang]。

《醒》の例。

説的晁大舍搭抗着頭裂着嘴笑。晁大舍肚喃着說道：“…”。(19.7a.9)

(“搭抗” = “搭拉”)

(そう言われて晁大舍は頭を下げつつ、口をゆがめて笑った。そして、晁大舍はぶつぶつ言うのです：「…」)

“肚喃”は文脈により釈義“嘟囔；小聲説(多是不滿意的話)”と解さざるを得ない。《例释》、《百部小说》に“肚喃”の釈義“嘟囔”とする。

“肚喃”(釈義“嘟囔”)の方言点は山東省淄博である(《汉方大》(p.2805)に拠る)。

“肚喃”は各方言辞典類に未収であるが、“嘟囔”の方は収める。《现汉》、《古今》、《汉语》

は“啣嚙”と“啣啞”[dūnong]を同一意義としてどちらも軽声語、一般語語彙で収める。《拼音词汇》に“啣嚙”を収める。

《汉方常》に“啣啣”及び“啣嚙”(釈義“啣啣”)をどちらも軽声語、北方方言として収める。《山东》、《河北方言》は“啣嚙;啣啣;啣念;啣罗”などの語を収める。《现代北京》は近似音語“啣啞”を“啣嚙”と釈義するが、“啣嚙”自身は立項しない。《安阳方言》は“啣嚙”、“啣拉”、“啣嚙”を釈義“小声地申辨或指责”(小声で弁明または指弾する)とする。

“啣嚙”の方言点は滄州、黒河、佳木斯、白城、錦州、済寧(“啣(啣)嚙(嚙)”)、西安、合肥である(《汉方大》(p.6510)、《基本词汇集》(p.2670)、《現漢方大》(p.4799)に拠る)。

### 老瓜 lǎogua(又)lǎoguā (老鴉)

釈義:「カラス」。現代共通語では一般に“乌鸦”。

《醒》の例。

相于廷道:“我夜來拿了個老瓜,細着翅子哩,偌拿了來,頭上也綁个炮燗,…。(58.4a.8)  
(“細着”=“捆着”)

(相于廷は「僕は夜にカラスを捕ったんだけど羽をしばってあるんだ。今、持ってきて頭に花火を結わえて、…」と言いました)

文脈により“老瓜”は「カラス」と解さざるを得ない。

“老瓜”(釈義“乌鸦”)の方言点は単なる官話である(《汉方大》(p.1645)に拠る)。

《例释》に“老鴉”(釈義“乌鸦”)を《蒲松齡集》より、“老瓜”を《醒》第五十八回より挙例する。

“老瓜”は、現代規範化文字では一般に“老鴉”と作る。《現漢》、《古今》は“老鴉”を釈義“乌鸦”、方言語彙として収録。《汉语》に“老鴉”を一般語語彙、軽声語で俗称とする。《拼音词汇》に“老鴉”で<口>符号を付して収める。

“老鴉”の方言分布は北京、天津、承德、唐山、保定、滄州、石家荘、邯鄲、平山、臨汾、赤峰、海拉爾、黒河、齊齊哈爾、佳木斯、白城、沈陽、丹東、錦州、青島、利津、諸城、済南、済寧、商丘、原陽、鄭州、洛陽、信陽、白河、西安、天水、阜陽、徐州、合肥(“老鴉[子]”)、貴陽、萬榮、婁底(“老鴉(子)”)である。南方諸方言には見られない(《汉方常》、《现代北京》、《河北方言》、《汉方词》、《基本词汇》(p.3706)、《現漢方大》(p.1230)に拠る)。

“老鴉”(釈義“乌鸦”)で北方方言とし、《刘宝瑞表演单口相声选》より挙例。

“老哇”[lǎowā](釈義“乌鸦”)は“鴉”[kua]の韻頭[k-]が脱落した“哇”[ua]を用いた同義語。《汉方常》では“老哇”を《河南方言词汇(续)》、《安庆方言词汇》、《武汉方言词汇》、《湖南省耒阳方言记略》に見えんとするだけで地域特定をせず。

“老哇”の方言点は黒竜江省哈爾濱、山西省廣靈、河北省井陘、陽原、山東省平度、青海省西寧、山西省運城、芮城、陝西省西安(“[黒]老哇”)、漢中、宝鷄、綏徳、河北省魏県、新疆



維吾爾自治区吐魯番、山西省大同、沁源、大寧、靈石、山陰、河南省林県、靈宝、濟源、河北省涉県、新疆維吾爾自治区哈密、烏魯木齊、寧夏回族自治区銀川((老哇)[鴉])、甘肅蘭州、安徽省安慶、桐城樅陽、貴池、南陵、青陽、江蘇省南京、南通、句容、揚州、四川省成都、重慶、昭通、達県、漢源((老哇)[鴉])、西昌、湖北省武漢、宜昌、天門、湖南省寧遠、吉首、雲南省大理、昆明、蒙自、貴州貴陽、黎平、清鎮、大方、遵義、畢節、浙江省金華岩下、永康、江蘇省丹陽、蘇州、常熟、南京、上海、上海嘉定、松江、湖南省衡陽、耒陽、長沙(“老哇[子]”)、双峰(“老哇子”)、湖北省蒲圻、福建省福州であり、概して北方方言区域に分布する(《山東》、《漢方詞》、《漢方大》(p.1655)、《現漢方大》(p.1208)、《基本詞匯》(p.3706)に拠る)。

同義語“老哇子”の方言点は哈爾濱、丹東、常德、蕪湖、漣水、烏魯木齊、長沙である(《現漢方大》、《基本詞匯》(p.3706))。

“黑老哇”の方言点は張家口、離石、太原、臨汾、長治、臨河、呼和浩特、二連浩特、黎平、敦煌(“(黑)老哇”)である(《基本詞匯》(p.3706))。

同音語“老鴉”の方言点は冀魯官話、“老蛙”(釈義“烏鴉”)の方言点を河北省成安、江蘇省溧水である。同音語“老呱”の方言点は山東省臨邑、陝西省北部、“老刮”の方言点は北京市平谷である。に“鵠”の韻腹[u]すらも脱落した“老啊”の方言点は揚州である(《漢方大》p.1658、p.1662、p.1211に拠る)。

《紅樓夢語言詞典》は“老鴉(子)”(釈義“烏鴉”)を収録し、“老鴉”は未収。《金瓶梅詞典》は“老鴉(兒)(子)”(釈義“烏鴉”)の方を収録し、“老鴉”は未収。

《現漢》に“老鴉”、“老鴉”いずれも方言語彙とするが、一般に前者が北方方言で後者が南方方言である。(因みに、《現漢方大》の“老鴉”の方言点を丹陽、萍郷、績溪、崇明、上海、蘇州、寧波、温州、南昌、黎川、于都、梅県、広州、建甌とし、北方ではない)。

### 攪包 nǎngbāo (濃包[nóngbāo];膿包)

釈義：「役立たず、能なし」。現代共通語では一般に“废物;无用”。

《醒》の例。以下の三種類“攪包;濃包;膿包”が見られる。先ず、“攪包”の例。

沒了我合老七，別的那幾個殘溜漢子老婆都是幾個儂濃啞血的攪包，不消怕他的。(53.8a.2)  
(私と老七がいなくなれば、他の何人かの残った男や女房どもは全て訳の分からない能なしばかりだから、そんな連中に恐れる必要はない)

素姐大怒，…，罵道：“我要你這攪包雜種做甚。…”(63.13a.8)

(素姐は大いに怒って…「この役立たずのろくでなしに何ができるっていうの！…」と罵りました)

惠希仁道：“俺那个是攪包，見了他，只好遞降書的罷了。到好合那單奶奶做一對的。”(81.5b.7)

(惠希仁は「ワシのあれは能なしさ。あの人に会えば仕方なく降伏の手紙を出すだけさ。)

単奥さんと対になるよりほかないよ」と言いました)

“攬包”は文脈により釈義“废物;无用”とせざるを得ない。黄肅秋注に釈義“废物、无能、不中用”、“就是脓包,无用”とする。

《现汉》、《古今》は“脓包”(釈義“比喻无用人”)と作り、一般語語彙として収録。共通語の大枠基準を示す《拼音词汇》にも収録する。《汉语》に未収。

《汉方常》に“囊包”[nóngbāo](釈義“软弱无能;脓包”)と作り山東方言で《聊斋俚曲集》より挙例。なぜ、本来“膿”字であるのに対し“囊”の字を用いるのか。《关中方言》(p.234)の“脓包”の項に“‘脓’字读nāng(囊),系双声音转”とする。

《北京话》、《现代北京》に未収。《山东》の“囊包”は釈義“渔民用语,即拖把儿”で意味が異なる。

《古方言》に“囊包”(釈義“懦弱无能”)で蒲松齡《墙头记》より、同音語“攬包”で《醒》より挙例。

“濃包”の例。

珍哥…,叫一會,罵一會,說道:“濃包忘八。渾帳烏龜。…”(3.12a.2)

(珍哥は…ひとしきりわめき、罵り、「能なしの恥知らず!バカの意気地なし!…」と言いました)

この“濃包”も釈義は“废物;无用”であるべきである。

“膿包”と作れば、共通語の大枠基準を示す《常》、《拼音词汇》にも収めるが、《醒》においてもこの使用頻度が最も高い。その例。

甚至于丈人也還有子,只是那舅子有些膿包,丈人死了,把丈人的家事抬个絲毫不剩, …。(26.2a.9)

(岳父に子供があったが、ただそのおじは少し能なしであった。岳父が死にますと、岳父の家財道具を少しも残らず悉く担ぎ出して、…)

《山东》は“脓包”を収録。《河北方言》の詞目“脓包”(指人废物,窩囊)の項に“囊包菜”(=“脓包”)を挙げるにすぎない。

“膿包”(釈義“比喻無用人”)の方言点は哈爾濱、萬榮、丹陽、萍鄉、于都、南京、柳州、成都、太原、忻州である(《現漢方大》(p.5926))。

## 屋業 wūyè (物業)

釈義:「資産、財産」。現代共通語では一般に“家产;家业”。

《醒》の例。

又說:“忘恩負義。沒良心。沒天理。晁無晏那夥子人待來搶你的屋業,我左攔右攔的不叫他們動手。…”(32.13a.4)

(また、「恩知らず!良心も無いのか!道理の分からず屋!晁無晏の奴らがお前らの

家財を奪おうとしていたとき、奴らが手を下さないうワシがあれこれ阻止してやったのじゃぞ。…。。」と申します)

老公看顧你一場,你合我裏頭住,就合爺娘分給孩兒們的屋業孩兒們守着,爹娘心裏喜歡;…。(71.8a.7)

(ご老公様がお世話下さって、我々がその中に住み両親から子供へと引き継いだ財産です。それを我々が守ってゆけば両親も喜びます。…。)

文脈により“屋業”の釈義は“家産;産業”と解さねばならない。《例釋》に“屋業”を《醒》第三十二回より挙例。《百部小説》にも収録。

“屋業”の方言点は山東省、浙江省金華岩下である(《漢方大》(p.4497)に拠る)。

“物業”の例。

只有這個姪兒,偌就有幾千幾萬兩的物業,人只好使眼瞞咱兩眼罷了,正眼也不敢看偌。(21.12a.2)

(この坊ちゃんさえおられれば、ワシらにたとえ何千何万両の財産があっても、他人は横目を使うだけにすぎず、まともにはワシらを見られないのですぞ)

我想偌攬的物業也忒多了;如今不知那些結着大爺的緣法,一應的差徭都免了偌的。(22.2a.10)

(私は思うんだが、うちの抱える財産はとても沢山あるのよ。今ではどういう訳か県知事旦那様とご縁を結び、全ての差役、賦役を免除下さっています)

楊春道:“你說的甚麼話。我一个錢賣已你,清早寫了文書,後晌就是你的物業;你掘幾千幾萬,也就不與我相幹了。…”(34.5a.9)

(“賣已” = “賣己”)

(楊春は「何をおっしゃいます。私は錢であなた様に売ったのです。朝、証文を書けば夕方にはあなた様の財産です。あなた様が何千何万両を掘り当てても私とは関係ありません」と言いました)

《例釋》に“物業”(釈義“家産;産業”)を《聊齋俚曲集》、《醒》第三十六回より挙例。

“物業”の方言点は山東省淄博、広東省広州、香港である(《漢方大》(p.3405)、《現漢方大》(p.2240)に拠る)。

《現漢》、《古今》、《漢語》、《補》、《拼音词汇》に“屋業”、“物業”ともに未収。

### 五積六受 wǔ jī liù shòu (五脊六獸)

釈義:「とても気分が悪い、しっくりしない、不安でときどきする」。現代共通語では一般に“浑身难受;不得劲儿”。

《醒》の例。黄肅秋注に釈義“委曲、别扭、窩囊、不舒服”とする。

狄婆子道:“這五積六受的甚麼模樣。可是叫親家笑話。”(59.5b.3)

(狄夫人は「とても気分が悪いよ。何てさまだい？本当に親戚の人に笑われるでしょうよ？」と言いました)

本来は、“五脊六兽”と作るべきで、もと“指宫殿式建筑上的五条脊和四角上各装饰的六个兽头”(「旧式建築の屋根の五つの峰及び四角に飾る獣の六つの頭」)を指す。

《现汉》、《补》に未収。《古今》に“五脊六兽”(釈義“因得意、气愤等心神不安的样子”)で方言語彙とする。このような歴史的な語が方言に残存しているのである。《漢語》は“五脊六兽”、“五积六受”(釈義“(1)谓殿宫式建筑,上有脊五条,四角各有兽头六枚。(2)因非分之享受,而忐忑不安之貌”)と作り、一般語語彙とするものの、用例は《醒》からの“五积六受”を挙げるにすぎない。

《汉方常》に“五脊六兽”(五脊子六兽)(釈義“形容浑身难受,不得劲儿”)で北京等地方言とし、耀亭《说聊斋》、《老舍戏剧全集》より挙例。《北京方言》に“五积子六瘦”(釈義“(1)形容因饮食不正常而骨瘦如柴的样子。(2)形容因为生活过于富裕而得意忘形的样子。<可能与‘五脊六兽’有关>”)、《山东》、《北京话》、《现代北京》(“五鸡六兽”、“五积子六兽”、“五脊子六兽”、“五鸡子六兽”とも作る)にも収録。

“五脊六兽”(釈義“心情烦乱不安”)の方言点は北京官話、冀魯官話、膠遼官話である。そして、同音語の“五脊六瘦;五饥六受”とも作るとする。“五鸡子六兽”を北京官話(北京)とする(《汉方大》(p.601)に拠る。なお、“五积六受”は未収)。

“五积子六瘦”を北京官話(北京)、“五脊子六兽”を北京官話(北京)とする。

《金瓶梅词典》に“五脊六兽”(釈義“形容建筑样式豪华。脊,房脊,包括一条主脊四条副脊;兽,兽头,脊端装饰。五条脊有六个兽头(主脊两端各一),一般作‘五脊六兽’”)を収録。

## 伍旋 wǔxuán (舞旋)

釈義:「愚弄する、弄ぶ」。現代共通語では一般に“玩弄;折腾;舞弄”。

《醒》の例。

及至拉過袄來,又提不着袄領。伍旋了半日,方纔穿了上下衣裳。(95.1360.3)

(袷の上着を引っ張って来たが、襟が分からない。長い間弄んでいたが、漸く上下の着物を着た)

文脈により“伍旋”は釈義“耍弄;舞弄”となる。《例释》に“伍旋”の釈義“舞弄”とする。

“伍旋”(釈義“舞弄”)の方言点は山東省である(《汉方大》(p.2026)に拠る)。

同音語“舞旋”の例。

惟狄希陳一个字也不認得,把着口教,他眼又不看着字,兩隻手在袖子裏不知舞旋的是甚麼,教了一二十遍,如教木頭的一般。(33.10b.7)

(ただ狄希陳だけが一字すらも分からない。口移しで教えても彼の目は字を見ていず、両手は袖の中へ入れ何かを弄んでいるよう。十回、二十回と教えても、あたかも木っ端

に教えているようなものです)

及至狄希陳進了房,睡倒覺,寄姐仍把狄希陳刺脊梁,搥胸膛,紐大腿裏子,使針札 膊,口咬 膀,諸般刑罰,舞旋了一夜。(79.11b.5) (“使針札” = “使針扎”)

(狄希陳が部屋へ入ってきますと、寄姐は<依然として>狄希陳の背中を引っ掻き、胸ぐらを掴み、太股の内側をつねり、針で腕を刺し、歯で乳首を噛みます。このように様々な刑罰を行い、一晚中悩ませます)

《山东》(p.363)に“舞旋”を釈義“挥舞”(振り回す、振る)の例“他两手乱舞旋,满嘴说胡话,不知得的什么病?”で収録。

“舞旋”(釈義“耍弄;舞弄”)の方言点は山東省淄博である(《汉方大》(p.6861)に拠る)。

《例释》に“舞旋”(釈義“耍弄;舞弄”)で《醒》第三十三回より挙例。また、《百部小说》にも収録。《方言俗语》(p.700)に“舞旋旋的”(釈義“转着圈儿地跳动”)で立項。《古方言》に“舞”(釈義“弄;舞弄”)一字で立項し、《儒林外史》より挙例。

《金瓶梅词典》に“舞旋”は未収も“舞旋旋”(釈義“形容蹦蹦跳跳”)を収録。

《现汉》、《古今》、《汉语》に未収。《拼音词汇》に未収。

### 鹽鰲戶 yánbiēhù (檐蝙蝠)

釈義:「コウモリ」。現代共通語では一般に“蝙蝠”。

《醒》の例。

尋思一遭轉來,怎如得做姑子快活。就如那鹽鰲戶一般,見了麒麟,說我是飛鳥;見了鳳凰,說我是走獸;…。(8.9b.2)

(いろいろ考えたけれど尼になるのが楽しいわ。コウモリのように麒麟にあえば私は鳥だと言えればいい。鳳凰にあえば私は獣だと言うのよ。…)

文脈により“鹽鰲戶”は「コウモリ」を指す。黄肅秋注に釈義“蝙蝠”とする。

《现汉》、《古今》、《漢語》、《补》いずれにも未収。《拼音词汇》に未収。

なぜ「コウモリ」が“鹽鰲戶”になるのか?コウモリは「のき」にぶら下がるので“檐”[yan]字を当てる。“檐”と“鹽”は同音語により“鹽”字を使用した。二番目の“鰲”字は“蝠”[bian]の[-n]が脱落したもの。三番目の“戶”字は“蝠”字を[fu]でも[hu]と発音することによる。また、コウモリは夜行性であるゆえ“鹽”の代わりに“夜”の字を当てる。“夜”[ye]は[yan](“檐”、“鹽”)の韻尾[-n]が脱落したものである。

《关中方言》に[biǎn]を[bié]と読音するのは双声音転で、[fu]を[hu]と読むのは疊韻の音転とある。《河北方言》に詞目“蝙蝠”の項で“盐巴蝠;盐巴虎;眼八虎;檐别虎”等を挙げる。《山东》も“檐蝙蝠子;燕蝙蝠儿”等で収める。

《汉方常》に「コウモリ」を示す語として“檐老鼠”(《南昌方言词汇》、《湖南省耒阳方言记略》、《四川方言词典》に見えるとする)、“燕巴虎儿”[yànbaǎhǔr](北京・天津等地方言とする)

を掲げる。

《近汉》、《百部小说》に“盐鳖户”（釈義“蝙蝠”）を収録。《古方言》の按語で“盐鳖户应是檐蝙蝠的借音”とする。つまり、[fu]（“蝠”）を[hu]（“戸”）と読音する。

《現漢方大》“檐憋蝠子”の按語に“蝠, 此處主要讀[xu↓], 聲母是[x]。郊區又說‘檐憋虎’”とする。即ち、“蝠”は[fu]とも発音するが、主として[hu]と読音するのである。

《汉方词》の詞目“蝙蝠”の項で“盐鳖户”（及びこれに類似する語）を指す方言点は、官話の北京（燕么虎儿）・济南（檐憋蝠子）・西安（夜标虎）・太原（夜壁蝠）のみである。即ち、南方諸方言には見られない。

語尾が[-fu]で終わる“檐蝙蝠”を指す方言点は石家莊、齊齊哈爾、長春、通化、瀋陽、信陽、天水とする。“（檐）蝙蝠”を指す方言点は唐山、黒河、白城、丹東、錦州、連雲港である。“夜蝙蝠”の方言点は張家口、陽原、忻州、長治、海拉爾、靈宝、蘭州、蒙自である。“（夜）蝙蝠”の方言点は邯鄲、西安、宝鷄である。儿化語“夜蝙蝠儿”の方言点は臨河、集寧、呼和浩特、二連浩特、綏徳である。“檐蝙蝠子”の方言点は徐州、諸城、漣水とする（以上、《基本词汇集》(p.3724)に拠る）。

“盐蝙蝠”（釈義“蝙蝠”）の方言点を冀魯官話（山東省淄博）、膠遼官話（山東省臨朐、牟平）、江淮官話（江蘇省淮安）とする。“盐变蝠”で方言点を北京官話（北京市順義），“盐别蝠”で方言点は膠遼官話（山東省煙台）である。“檐憋蝠子”（p.5874）の方言点は济南である（《汉方大》(p.4635)、《基本词汇集》(p.3724)、《現漢方大》(p.5874)）。

語尾が[-hu(zi)(r)]で終わる“檐蝙蝠儿”を指す方言点は承德、大連とする。“檐蝙蝠”を指す方言点は煙台、原陽、鄭州とする。“檐壁虎儿”の方言点を利津、“檐憋虎子”の方言点を济南とする。“（夜）憋虎子”の方言点を阜陽とする。

同義語“盐变虎”の方言点は晋語（山西省沁県），“盐变呼”の方言点は中原官話（河南省鄭州），“盐蝙蝠乎”の方言点は冀魯官話（山東省淄博、桓台）である。

《汉方大》(p.4635)、《現漢方大》(p.6390)、《基本词汇集》(p.3724)に“鹽鳖户”「コウモリ」を指す語は無い。

## 造子 zàozi （遭子）

釈義：「しばらくの間」。現代共通語では一般に“一会儿”。

《醒》の例。

差了薛三省娘子送的晚飯, 讓着狄希陳吃了兩個火燒, 一碗水飯, 摸摸了造子出去了。

(44.15a.2)

（薛三省のかみさんに晩飯を届けさせ、狄希陳に二つの火焼と粥一碗を勧め食べさせた。狄希陳は暫く部屋の中において、そして出て行った）

相矜子又說素姐先到洪井衙衙, 寄姐合調羹不肯相認, 混混了造子, 來了; 又撞到當舖, 又

怎麼待往皇姑寺, 没得去, 上吊 潑。(78.14a.3) (“上吊” = “上吊”)

(相矜子は、素姐が先ず洪井胡同へ行ったこと、寄姐と調羹は知らないと暫くはごまかしたこと、質屋へ行き、そして皇姑寺へ行こうとして行けずに首を吊り騒ぎ立てた事を言った)

單完道: “情管劉振白管了造子事, 狄爺合童奶奶没致謝, 所以纔挑唆他告狀, 這事再没走滾。” (81.9a.4)

(単完は「きっと劉振白がやらかした事です。狄旦那と童奥さんは奴にお礼をされなかったから奴が訴え出ると唆したんです。違いない」と申します)

文脈から“造子”は釈義“一会儿”である。《例釋》に釈義“一会儿”を“子”、“噪子”(以上、《聊齋俚曲集》より挙例)、同音語“造子”、“遭子”(以上、《醒》第三十回より挙例)とする。《古方言》に“造子”は“遭子、噪子”とも作るとする。

“造子”(釈義[名詞]“一会儿”)の方言点は山東省である(《漢方大》(p.4903)に拠る)。

同音語“遭”に量詞の用法がある。《拼音词汇》に“遭子”は未収。

また、“遭子”(釈義[名詞]“一会儿”)の方言点を山東省とし、《醒》第四十回より挙例。同音語“噪子”の方言点を山東省とし、《聊齋俚曲集》より挙例(《漢方大》p.6778、p.7241に拠る)。

## 着主 zháozhǔ (找主儿)

釈義:「婿探しをする」。現代共通語では一般に“女子找婆家”。

《醒》の例。

童奶奶道: “你這位娘子別要胡說。…。我爲他年小無靠的, 勸他嫁夫着主的去了。…” (77.6b.5)

(童夫人は「奥さん、ばかな事を言わないで下さいよ。…。私はこの人が年も若いし身寄りも無いから彼女に婿探しを勧めたのです。…。」と言った)

文脈から“着主”を同音語の“找主”と解釈すれば文意は通る。《漢方大》(p.5808)に“着主”は未収。

《漢方常》に“找主儿”を北方方言、釈義“女子找婆家”、浩然《金光大道》より挙例。

“找主(儿)”の方言点は東北、山東省淄博、桓台、済南、江蘇省徐州である(《漢方大》(p.2525)、《現漢方大》(p.1613)に拠る)。

《古今》に“找主儿”を釈義“寻找、征求所需的对象”で方言語彙とする。なお、《現漢》、《漢語》に“找主儿”は未収。《拼音词汇》に未収。

## 2.2. 本字が確定できないもの

この語群:

魔駝(磨拖、磨它子)、頭信(投性、投心、投信)

## 魔駝 mótuó (磨拖;磨它子)

釈義:「ぐずぐず引きのばす、だらだらと引きのばす」。現代共通語では一般に“拖延;動作迟缓”。

《醒》の例。

晁大舍又走到厨屋門口,說道:“你們休只管魔駝。中收拾做後晌的飯,怕短工子散的早。”  
(19.6a.9)

(晁大舍はまた台所の入り口へ行き「お前達、ぐずぐずするなよ。晩飯の準備をしろ。恐らく臨時雇いはやめるのが早いからな」と言った)

文脈により、“魔駝”は釈義“磨蹭;拖延;動作迟缓”とするべきである。黄肅秋注に釈義“挪蹭、迟延”、胡適「考証」にも釈義“迟延”とする。《例释》に“魔駝”を釈義“磨蹭(時間)”とする。

“魔駝”の方言点は山東省である(《汉方大》に拠る)。

“魔駝”は“磨拖”と作るべきである。それでも《现汉》、《古今》、《汉语》、《补》いずれにも未収。《拼音词汇》にも“魔駝”、“磨拖”等を未収。

《现代北京》に“磨駝子”[mótuózi]を収録、釈義を“(1)磨蹭;拖沓。(2)拖沓的人”とする。

“磨陀”の方言点は山東省淄博である(《汉方大》に拠る)。また、“磨拖”(釈義“(办事)拖拉”)の方言点は山西省忻州である(《汉方大》、《現漢方大》(p.5780)に拠る)。“磨駝子”(釈義“磨蹭;拖沓”(借自满語))の方言点は北京である(《汉方大》に拠る)。

《例释》に“磨陀”(釈義“磨蹭(時間)”)で《聊斋俚曲集》より挙例。《古方言》は蒲松齡《墙头记》第二回及び《醒》より“磨陀”を、また、《儿女英雄传》より“磨它子”を挙げる。《兒女英雄傳》からの例。

玉鳳想了半日,忽然計上心來,說:“有了,等我合他們磨它子,磨道那兒是那兒。”  
(《兒女》27.12b.6)(“磨道”=“磨到”)

(玉鳳は長い間考え、突然ひらめくと「そうだわ、こんな人達、ぐずれる所までぐずぐずと引き延ばしてやろう」と言った)

《例释》、《古方言》、《百部小说》にも近似音語“磨它子”が見える。

現代では一般に“磨蹭”[mócéng]を用いる。《现汉》、《古今》、《汉语》に“磨蹭”を一般語彙として収録。《拼音词汇》にも収めるゆえ、共通語の位置を占めるように見える。ところが、《汉方常》は“磨蹭”を北方方言とし、《京剧丛刊》、雑誌《北京文学》より挙例する。《山东》にも収める。《河北方言》に詞目“死慢”(釈義“慢极了”)の項で“磨古”(唐山地区:樂亭)等と共に“磨蹭”(承德地区:滦平、围場。張家口地区:各地)を収める。

## 頭信 tóuxin (投信;投性;投心)



釈義：「思い切り、むしろ、いっそのこと、思い切って」。現代共通語では一般に“索性；干脆”。

《醒》の例。“頭信”の場合。

他就展爪，頭信狠他一下子，己他個翻不的身。(15.5b.7)

(奴らが小細工を弄するんだよ。我々が思いきって奴らをこらしめ、自由の身になれなくしてやるんだ！)

狄婆子…，叫狄周送到他家説：“要後晌回來，頭信叫他來再過這一宿也罷。”(40.15a.2)

(狄奥さんは…、狄周を呼んで彼女の家へ届けさせ、「夜戻ってこないといけないよ。いや、むしろ彼女に来て貰って、もう一晚泊まってもいい」と言いました)

小獻寶説：“就是出殯，沒的這兩三千錢就夠了麼。頭信我使了，我在另去刷刮。”(41.6b.4)

(小献宝は「よしんば出棺するにしても、この三千両の銀子があれば充分でしょ？むしろ、私が使って、別に金を工面しますよ」と言った)

“投信”の例。黄肅秋注に“犹头信，索性”と解説する。

若另尋將來，果然強似他，投信不消救他出來，叫他住在監裏，十朝半月進去合他睡睡。

(18.4b.4)

(もし他に捜すとしても、彼女よりもまだましならば、むしろ彼女を救い出すこともなかろう。彼女には牢獄に入って貰っていて、十日から半月の間、ワシが彼女と寝に牢獄へ行けばいいんだ)

老婆子説：“休慣了他，投信打已他兩個巴掌，叫他有怕懼。”(57.5b.1)(“打已” = “打己”)

(老婆子は「あの子を甘やかさせちゃいけないよ。思い切って、あの子に平手打ちを喰らわし、恐れさせるのがいい」と言いました)

“投性”の例。

女先道：“放着這戌時極好，可不生下來，投性等十六日子時罷。這子時比戌時好許多哩。

”(21.4a.9)

(女道士は「この戌の刻になればとても良いのです。もし、それで生まれなければむしろ十六日の子の刻です。子の刻は戌のときよりも余程良いのです」と言いました)

文脈から“頭信”、“投信”、“投性”は釈義“索性；干脆”と解さねばならない。しかし、これらはどれが本字か、または別に本字が存在するのか不明である。胡適『『醒世姻缘傳』考証』に“头信；投信；投性”を釈義“爽性；索性”とする。

《汉方常》に韻尾[-ng]の“投性”(釈義“干脆；索性”)で北方方言、軽声語とし、《醒》より挙例。

“投性”の方言点は河北省青県。山東省淄博である(也作“投信”)(《汉方大》(p.2573)に拠る)。

また、同音同義語“头幸”[tóuxing]と作り北方方言とし、《天津方言词汇》に見えんとする。

一方、《山东》は韻尾[-n]の“投心”(方言点：德州)で収録。

“头信”の方言点は山東省淄博である(《汉方大》(p.1476))。

《百部小说》、《古方言》、《近代汉语虚词词典》、《例释》も韻尾[-n]、[-ng]の双方を含んだ“头信;投信;投性”(釈義“索性;干脆”)の三者全てを《聊斋俚曲集》、《醒》第五十八回、四十回、十九回、二十一回より挙例。

[注]

- 1)本稿の骨子は 2005 年 5 月 29 日開催の「近世中国語学会 第 20 回研究総会」(於：愛知大学車道学舎)にて口頭発表した一部である。席上、貴重なご意見を賜り感謝致します。
- 2)植田均 2005「現代方言に継承された《醒世姻縁傳》の同音仮借の語(上)」、『中国語研究』第 47 号(2005 年 10 月刊)。なお、本稿で用いる略称は植田 2005 に同じ。
- 4)各用例の数字は順に章回数、葉数、a はオモチ、b はウラ、行数を示す。以下、同じ。原本通り、繁体字が基本であるが、時に一部簡体字を使用するのは原文のまま表記したからである。

[主要文献]

- 西周生，《醒世姻縁傳》(全五冊，袁世碩前言)，「古本小説集成」所収，上海古籍出版社，1994 年版。略称《醒》。
- 西周生，《醒世姻縁傳》(全二十冊)，人民文学出版社，1988 年 1 次，1994 年 2 次印刷版。
- 西周生，《醒世姻縁傳》(全三冊，黄肃秋校注)，上海古籍出版社，1985 年版。
- 文康，《兒女英雄傳》(全五冊)，「古本小説集成」所収，上海古籍出版社，1994 年版。略称《兒女》。
- 中国社会科学院语言研究所词典编辑室，《现代汉语词典》(第三版)，商务印书馆，1996 年版。略称《现汉》。
- 吴昌恒等，《古今汉语实用词典》，四川人民出版社，1989 年版。略称《古今》。
- 《汉语词典》，商务印书馆，1937 年(商务印书馆香港分局，1977 年版)。略称《汉语》。
- 闵家骥等，《汉语方言常用词词典》，浙江教育出版社，1991 年版。略称《汉方常》。
- 董绍克、张家芝主编，《山东方言词典》，语文出版社，1997 年。略称《山东》。
- 董遵章，《元明清白话著作中山东方言例释》，山东教育出版社，1985 年。略称《例释》。
- 徐复岭，《醒世姻縁傳作者和语言考论》，齐鲁书社，1993 年。略称《考论》。
- 陈刚、宋孝才、张秀珍，《现代北京口语词典》，语文出版社，1977 年，《现代北京》。
- 陈刚，《北京方言词典》，商务印书馆，1985 年。略称《北京方言》。
- 景尔强，《关中方言词语汇释》，陕西人民出版社，2000 年。略称《关中方言》。
- 《汉语拼音词汇》(1989 年重编本)，语文出版社，1991 年。略称《拼音词汇》。
- 李申，《金瓶梅方言俗语汇释》，北京师范学院出版社，1992 年。略称《方言俗语》。
- ，《徐州方言志》，语文出版社，1985 年。

- 吴士勋、王东明主编，《宋元明清百部小说语词大词典》，陕西人民教育出版社，1992年。略称《百部小说》。
- 林宝卿，《闽南方言与古汉语同源词典》，厦门大学出版社，1999年。略称《闽南方言》。
- 章一鸣，《『金瓶梅词话』和明代口语词汇语法研究》，上海古籍出版社，1997年。
- 周定一主编，《红楼梦语言词典》，商务印书馆，1995年。
- 馬鳳如，《山東方言の調査と研究》，白帝社，2004年。
- 白维国，《金瓶梅词典》，中华书局，1991年。
- 张喆生，《古方言词语例释》，江苏教育出版社，1999年。略称《古方言》。
- 北京大学中国语言文学系语言学教研室，《汉语方言词汇》（第二版），语文出版社，1995年。略称《汉方词》。
- 傅兴岭、陈章焕主编，《常用构词字典》，中国人民大学出版社，1982年。略称《常》。
- 许宝华、宫田一郎主编，《汉语方言大词典》（全五册），中华书局，1996年。略称《汉方大》。
- 李荣主编，《現代漢語方言大詞典》（全六册），江苏教育出版社，2002年。略称《現漢方大》。
- 陳彭年等重修，《校正宋本廣韻》，台北藝文印書館，1981年版。
- 王力主編，《王力古漢語字典》，中華書局，2000年。
- 笑笑生，《金瓶梅词话》（万历本），大安影印本，1963年版。略称《金瓶梅》。
- 陈章太、李行健主编，《普通话基础方言基本词汇集》（全五册），语文出版社，1996年。略称《基本词汇集》。
- 李行健，《河北方言词汇编》，商务印书馆，1995年。略称《河北方言》。
- 饶秉才、欧阳觉亚、周无忌，《广州话方言词典》，商务印书馆香港分馆，1981年。
- 闵家骥等，《简明吴方言词典》，上海辞书出版社，1986年。略称《吴》。
- 丁全、田小枫，《南阳方言》，中州書籍出版社，2001年。
- 雷文治，《近代汉语虚词词典》，河北教育出版社，2002年。
- 胡适 1932，「《醒世姻缘傳》考証」（排印本・上海古籍出版社《醒世姻缘傳》「付録二」所収）。
- 香坂順一，「醒世姻缘の作者とことば」，《『明清文学言語研究会会報』5号，1964年。
- 植田均 2005，「現代方言に繼承された《醒世姻缘傳》の同音仮借の語—単音節語の場合（上）」，《『中国語研究』第47号（「同（下）」は『中国語研究』第48号に掲載）。